



古屋の守り

高山 幸子
(三重)

このごろの私

娘一家とにぎやかに暮らしてきたが、孫たちが成長し家が狭くなってきた。そこで、私たちは夫の生家へ越すことにした。新たに始まる暮らし、楽しみ半分、不安半分のこのごろの私である。

日の暮れを「おしまいなして」交わしゆく媼もわれも間引き菜抱え

山里に光のバトン渡りきぬサンシユ、レンギョウようやく咲けり

鉄砲屋、左官屋、籠屋いまもお屋号で名のわが家は味噌屋

べんがらの褪せし格子戸はまる家姑が二十年ひとり住みおり

天井の低き家にて娘婿身を縮めては部屋に入りゆく

舅姑も祖も上りし黒く光る箱階段は足裏にぬくし

「おしおきはこの蔵やった」杓き日を想うらし夫の声やわらかき

庭に建つ蔵なつかしみこの母屋を終の住処にすると夫言う

大ぶりの梅干しひとつが隠し味姑にならいて荒布炊きあぐ

「カレーの葉」児らが名付けし月桂樹庭につきおり夕餉のしたく

ふりだしに戻りて住まう七回の転居の末に夫の生家へ

何代の人が住みしやこの家のまずは厨をキッチンとせむ

山里の古屋の守りも面白し山姥となり山野を駆けむ

和箆筒に眠れる姑の名古屋帯バッグとなりて鶴のはばたく

跳ねている春の光を浴びながら畑の草とりはかどる朝



地上の騒ぎ

水辺 あお
(静岡)

このごろの私
川べりを歩いている。金星
が残る未明に懐中電灯を持っ
て家を出る。額にライトをつ
けている人が前から来ると、
火星人に見えて怖い。空は、
次第に深いブルーからオレン
ジになる。その瞬間がいい。

国境の海が荒るる日枝先の金柑の実は春風に輝る

如月のまぶしき空を鳥ゆけり地上の騒ぎ届かぬ空を

愛用のグラスがふいに割れにけりひとつの旅を終へしごとくに

風花は道をぬらさず横に逸れあるいは青き空に消えゆく

屋根のある家に暮らせば春雨は家の周りを包みて降り

朝刊を配るバイクが新月の土手の菜の花照らしてゆけり

夜明けまへ星は光を失ひて寒き地球にわれは脚で立つ

赤坂のコンビニで買ふおにぎりはわが町のとはどこかが違ふ

駅降りていぬふぐり咲く近道を〈黒地に金の虎〉提げて帰る

新聞も郵便物も道々の花粉をまとひわが部屋にくる

わが妻は百舌か冷蔵庫にいくつもの正体不明の瓶とタッパー

妻は留守陽のあるうちに湯につかり昼の残りを肴に吞まん

秒針が分針をぬき分針が時針をぬきて話題なき夜

妻長く入院せし日に購ひしモディリアーニの少女は老いず

嘘つきて恥ぢることなき人たちが開けたる口の闇でつながる